國學院大學學術情報リポジトリ

古代語文末助詞の研究

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 富岡, 宏太, Tomioka, Kota メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00002428

古代語文末助詞の研究（要旨）

文学研究科文学専攻 富岡宏太

一 研究の目的と全体の概要

本論文では、古代日本語、特に中古の文末助詞の研究をおこなった。本研究における「文末助詞」とは、一言で説明するならば、文末に現れ、文を終止させる機能を持つ助詞のことである。一般に、終助詞と呼ばれるもの、および、関投助詞のうち文末に現れたものを対象にしている。これらの中から、従来の研究や辞典類で、「詠嘆・強調」の意味を持つとされる文末助詞、カナ・ヤ・ヨについて調査・考察をおこなった。

本論文は、第一章「本研究の背景と意義」、第二章「命令形下接の文末助詞ヨ・ヤ」、第三章「体言下接の文末助詞カナ・ヤ」、第四章「体言下接の文末助詞ヨ」、第五章「カナとヤとヨの「詠嘆」について」、第六章「詠嘆」と対話・独話」、第七章「詠嘆表現の構文の型」、第八章「今昔物語集の文末助詞カナ」、第九章「三代集のカナ」の九章からなる。これらは、大きく分けて四つの部分に分けられる。第一章は、本研究の射程やその意義について述べたうえで、先行研究のまとめを行い、議論の前提となる事項を整理したものである。次に、第二章から第五章では、中古和文資料を対象として、カナ・ヤ・ヨの差異と共通点とを明らかにすることを目的とする。以上で、カナ・ヤ・ヨの違いについて触れたあと、第六章から第九章では、文末助詞の研究がその周辺領域にまで資することを提示していく。特に第六章と第七章とは、文末助詞研究をもとに、詠嘆表現全体について考える。その後の第八章と第九章とは、特にカナに注目し、文体ごとにどのような特徴が見られるのかについて、調査・考察を行なっている。

二 各章の概要

二・一 第一章 本研究の背景と意義

前述のとおり、本研究の射程は「詠嘆」の文末助詞である。従来の古代語のムード研究の多くは、助動詞や補助動詞を対象とするものである。これに対して、文末助詞の研究は立ち遅れている。そこで、研究の必要が生じるわけである。

ではなぜ、「詠嘆」の文末助詞に注目するのか。現代語や方言の研究では、文末助詞の研究が一定程度、進んできている。しかしこれらの研究では、情報伝達手段としての言語の側面に注目しているため、感情表出など、情報伝達を目的としない言語の側面にも光を当てる必要がある。しかも、古代語は現代語とは異なり、「詠嘆」の文末助詞が多様であり、その意味でも研究の意義があるのである。

しかしながら、実際に研究するとすると、その方法が問題となる。現代語や方言の研究では、発話者の内省により、理論の正しさを確かめることができる。それに対して古代語には、話者が存在しないわけであるから、同じ方法を採用することはできないのである。そこ

で本研究では、「上接形式が同一、もしくは類似でありながら、助詞が異なる場合を対照する」という方法をとることとした。上接形式が類似、もしくは同一のものであるならば、用法や意味の上での差異は助詞に起因すると考えられるからである。このような方法を採用することで、これまで詳らかにされてこなかった、助詞の機能の側面を記述することができるものと考えられる。

二・二 第二章 命令形下接の文末助詞ヨ・ヤ

第二章では、命令形にヨが下接したものの（以下、「命令形ヨ」と呼ぶ）と、命令形にヤが下接したもの（以下、「命令形ヤ」と呼ぶ）との違いについて、命令形単独で終止するもの（以下、「命令形」と呼ぶ）も交えて対照した。

比較の基準としては、①「命令形ヨ」・「命令形ヤ」両者の表現可能な範囲、②望まれる内容を実行するかどうかについての対話者の選択権の有無、③発話者による「要求」に緊急性があるかどうか、という三点によった。

調査の結果、「命令形ヨ」「命令形ヤ」ともに発話者が対話者に向かって事態実現を望む「要求」の例に限られることがわかった。この点、「命令形ヨ」と「命令形ヤ」とは、共通する。その一方で、相違点もある。対話者の選択権を優先する例は、「命令形ヤ」よりも「命令形ヨ」の方に多い。さらに、緊急性の有無という観点では「命令形ヤ」が緊急性のあるものに限定されるのに対し、「命令形ヨ」は緊急性のあるものとならないものとの両方が見られることを指摘した。以上の指摘のうち、特に重要なのは「命令形ヤ」における緊急性である。これが何を意味するかについては、後述する。

二・三 第三章 体言下接の文末助詞カナ・ヤ

第三章では、体言にカナとヤとが下接した「体言カナ」と「体言ヤ」とを対照した。両者には、連体修飾を必須とするという構文上の共通点と、その形式が異なるという相違点とがある事が従来指摘されている。本章では、両者の使用特徴の違い、使用特徴と構文との関係を明らかにした。

「体言カナ」が対話者の属性を問わず、時間軸上の様々な位置にある事態に言及できるのに対し、「体言ヤ」は上位者には用いられず、ほとんどが現在の事態に言及した例である。本研究では、これらの違いが生じる理由について、両者の詠嘆の質が異なるためであると考えた。具体的には、「体言カナ」が様々な事象を考慮した「ニュートラルな評価の表明」の表現であるのに対して、「体言ヤ」はそれらを考慮しない「臨場的な評価の表明」の表現であるということである。

さらに、「体言カナ」「体言ヤ」の表現性と構文とは密接な関係にあると考えられることを指摘した。「体言カナ」が連体修飾句内に助動詞や敬語補助動詞をとることができることは「体言カナ」の表現域の広さと関係があると考えられる。同様に、「体言ヤ」の連体修飾句が「形容語語幹十ノ」の形式を基本とし、助動詞や補助動詞を使用した例がほぼ見られ

ないのは、その表現域の狭さと関係があると考えられるのである。

二・四 第四章 体言下接の文末助詞ヨ

第四章では、体言にヨが下接した「体言ヨ」について調査・考察を加え、次の五点を明らかにした。①発話者と対話者との関係を見ると、「対話者あり」の例が「対話者なし」の例よりも多く見られる。この点で、「体言ヨ」は、「体言カナ」「体言ヤ」と比して、対人性の強い表現である(ただし、「対話者なし」の例や地の文の例も決して少ないわけではない点に注意が必要である)。また、発話者と対話者との関係から見ると、上位者にも下位者にも使用される点で、「体言カナ」と共通する。②発話者と対象事態との関係を見ると、「体言カナ」「体言ヤ」よりも表現可能な範囲がきわめて広い。ただし、事態そのものを示す例が典型であるという特徴がある。③「体言ヨ」に①のような特徴が見られるのは、「注意喚起」を行うだけの表現であるからだと考えられる。④「体言ヨ」は、対象事態そのものを投げ出すタイプの表現である。言及される事態そのものは、時間・空間軸上の様々な位置に存在しうる。そのため、幅広い領域をカバーすることができる。⑤の特徴が見られるのは、このためだと考えられる。⑤「体言ヨ」、ひいては助詞ヨに共通する意味は、「注意喚起」であると考えられる。このように考えると、「連体形ヨ」「命令形ヨ」などとの関係も捉えやすくなるように思われる。

二・五 第五章 カナとヤとヨの「詠嘆」について

第五章はここまでのまとめの位置づけである。ここまでのカナ・ヤ・ヨの考察をもとに、それぞれの「詠嘆」の質の違いについて言及した。

まずカナは、もともとニュートラルな「詠嘆」を表す文末助詞である。発話者の情感や評価を表すため、現場外の事態、未実現事態に対する「詠嘆」は表さない。次にヤはイマ・ココの事態に対する発話者の情感のみを表す文末助詞である。極めて限定的な範囲でしか使用されないが、その分、臨場性のある「詠嘆」を表すことができる。さらにヨが表すのは「注意喚起」であり、「詠嘆」の意味を持っているわけではない。ヨの持つ「注意喚起」の意味が、文脈に応じて詠嘆表現となるのである。

このように、従来、同じ「詠嘆」の意味を持つとされてきた文末助詞であっても、その内実は様々であることが明らかになった。

二・六 第六章 「詠嘆」と対話・独話

第六章では、助詞カナの調査・考察を通して、「詠嘆」いう意味と、対話・独話、どちらに使用されるかという用法との関係について述べた。助詞カナは、「詠嘆」の意味を持つとされ、「ゝなあ」のような、独話的性格の強い訳がなされてきた。一方、先行論では、カナで終了した、カナ終止文のうち、特にコトカナで終了した文に、対話者を意識した対話的性格の強い例が見られる事を指摘し、カナを単に「詠嘆」の助詞とする事に疑義を呈して

いる。

そこで本章では①対話的性格の強い例は、コトカナで終止する文のみにあらわれるのかという用法の問題、②カナが持つ「詠嘆」の意味と対話的性格の強い例のある事とは、どのような関係にあるのかという助詞の意味の問題の二点に分け、調査・考察した。

結論として、①対話的性格の強い例はカナ終止文の構文の違いにかかわらず見られる事、②「詠嘆」という意味と、対話的性格の強さという用法とは、異なる次元の問題である事の二点を述べた。本章は、文末助詞を通して、「詠嘆」とは何かについて考えると同時に、用法と意味とを分ける必要性を論じたものと言い換えられる。

二・七 第七章 詠嘆表現の構文の型

第七章では、カナ・ヨの構文をもとにして、詠嘆表現と呼ばれるものの中に、いくつかの文型が見られることを指摘する。具体的には、詠嘆を表す構文を評価語句と評価対象を表す語句との関係から四種六類に分類し、カナ・ヨのとする構文の分布に差異が見られることを明らかにした。まず、ヨで終止する文には評価語句が現れる事が少ないという先行研究の指摘を数値によつて検証した。次に、カナで終止する文には、評価語句を中心とする例が確かに多いものの、そうではない例も相当数見られ、汎用性の高い形式であることが明らかになった。この構文の特徴は、第五章までに確認した、助詞の意味とも齟齬をきたさず、構文的特徴と助詞の意味とは、密接な関係にあるものと考えられる。加えて、評価語句と評価対象となる語句との意味関係に注目した場合、ともにカナで終止する「体言カナ」と「活用語カナ」との間にも、大きな差異が見られることを指摘した。「体言カナ」においては、評価語句が中心となる例がほとんどである一方で、「活用語カナ」には評価対象を表す語句が中心となる例も相当数見られる。このことは、同じ文末助詞で終止する文であっても、上接語の品詞の違いなどによつて、より詳細に分けて考察していく必要性を示している。

二・八 第八章 今昔物語集の文末助詞カナ

第八章では、今昔物語集の文末助詞カナについて調査・考察をおこなった。和文資料と漢文訓読資料とは、文末助詞カナの上接語句の違いが見られる。たとえば、和文資料には、体言にカナが下接して構成された「体言カナ」の例が多く見られ、形容語がカナの直上に現れる例（以下、「形容語＋カナ」）は僅少である。これに対して、漢文訓読資料には、「体言カナ」の例が見られず、「形容語＋カナ」の例が多く見られるとされている。以上の指摘を組み合わせると、カナの上接語句は、文体によつて、大きく傾向の異なることが予想される。しかし、それを検証したものは管見の限り見られない。そこで、巻ごとに文体の異なる今昔物語集を使用して、カナの上接語句の分布を調査した。

その結果、「形容語＋カナ（ヤ）」がより漢文訓読的、「体言カナ」、「動詞（句）＋カナ」がより和文的というように、カナの上接語句が文体と密接にかかわっている事、カナの承

ける上接語句が文体をはかる指標となる事、の二点が明らかになった。

そのうえで、より和文的な本朝部に「形容語カナ(ヤ)」が使用され、より漢文訓読的な天竺・震旦部に「体言カナ」「動詞(句)カナ」が使用される理由についても考察を加えた。前者は、発話者の位相に基づき、意図的に使用されたものであり、後者は、和文要素の介入により、偶然に使用されたものであると考えられる。

このように、カナの上接語句を調査・検討することによって、文体や位相の特徴も探ることができるようになるのである。

二・九 第九章 三代集のカナ

第九章では、三代集のカナを、上接後の観点から調査した。その結果、韻文のカナの上接語句が、散文や漢文訓読資料のそれとは大きく異なることを指摘した。

まず、韻文を調査すると、「活用語カナ」の例が「体言カナ」の倍以上見られる。したがって、「体言カナ」と「活用語カナ」とがともに相当数現れる散文との間には、大きな差異があると言えよう。また、「活用語カナ」の出現率の高さという点で、韻文のカナと漢文訓読資料のカナとは共通するよう見える。しかし、両者にも違いが見られる。韻文においては「動詞(句) + カナ」の例が多く、漢文訓読資料には、「形容語 + カナ」の例が多いという点である。

また、「動詞(句) + カナ」の多さという点から観ると、散文のカナと韻文のカナとは同じような傾向を示すが、情意・評価の形容語の使用の有無という点で、両者は大きく異なる。散文のカナには、情意・評価の形容語が多く用いられるが、韻文のカナにはそれらがほとんど用いられない。

この理由について先行研究では、情意・評価の形容語による「一般化」を避けるためとしてきた。それに加えて本章では、前代のカモの特徴を引き継いでいることも重要であると述べた。

二・一〇 終わりに

「終わりに」では、今後の課題について述べた。本論文の観点は、一定の視座から体系的に記述するというようなものではなく、むしろ少数のものを、様々な視座から記述し、考察していく、いわば多角性を重視したものである。このような視座に基づいて、論を進めてきた以上、逆に一つの視点からの体系的な記述は、今後の課題として残されたままである。

また、今回の調査では、対象を、体言もしくは活用語連体形によってまとめあげられた体言相当句、さらには命令形によってまとめられた命令文など、特殊なものに下接した文末助詞のみに絞ってきた。その最大の理由は、文末助詞の特徴をあぶり出しやすくするため、というものであった。したがって、中古の共時面における、カナ・ヨ、およびヤの一部の機能に関しては明らかにすることができたと考えられる。しかしその一方で、文末助

詞の全容を解明していくためには、さらなる調査が必要である。特に、平叙文に下接する文末助詞に関して明らかにし、本論文で扱った助詞群とのかかわりを探っていくことは、詠嘆の文末助詞という枠組みを超え、共時面の文末助詞の全体像を明らかにしていくことにもつながると考えられる。これらの問題については、今後の課題とする。

(以上、四〇×一八〇行〓七二〇〇字)